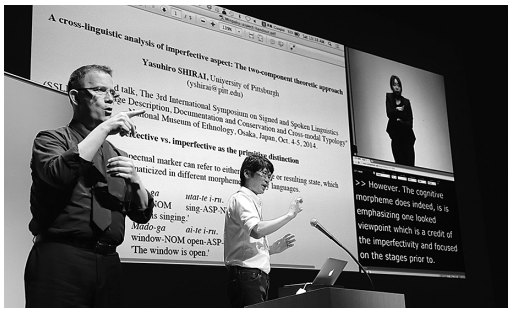
研究成果の公開――最近開催されたシンポジウムから



左からアメリカ手話通訳、講話者（英語による講演）、スクリーンには、日本手話通訳および英語同時筆記を投影

機関研究「手話言語と音声言語の比較に基づく新しい言語観の創生」

第３回手話言語と音声言語に関する国際シンポジウム

「言語の記述・記録・保存と通モード言語類型論」

日時：2014年10月4日（土）～5日（日）
場所：国立民族学博物館
主催：人間文化研究機構、国立民族学博物館
協力：大阪芸術大学放送学科、大阪芸術大学テレビ事務室、筑波技術大学
協賛：株式会社コングレ
後援：日本手話学会、社会福祉法人全国手話研修センター日本手話研究所、一般財団法人全日本ろうあ連盟、日本言語学会
助成：日本財団
企画：菊澤律子（国立民族学博物館）

本シンポジウムは、手話言語学の研究成果を国内で紹介すると同時に、共通する研究テーマに取り組む手話言語と音声言語の研究者が、コミュニケーション形態が異なる言語に関するディスカッションの場を持つことで、言語分析についての新しいアプローチの可能性を模索することを目的として開催した。2日にわたるシンポジウムでは、ディスカッションを重ねることで、今後の研究の方向性を探ることができ、また、音声言語学研究者にとっては、手話言語にみられる現象を加味することで、これまで音声言語のみに基づいて積み上げてきた言語理論や言語の基本概念を広げるきっかけとなった。当日は、主要な使用言語である英語・アメリカ手話の他に、日本語および日本手話通訳、英語同時筆記を提供することで、ろう・聴両方の研究者の参加を可能にした。また、一般公開することで、関心のある方々に広く内容を聞いてもらう機会を提供でき、社会的意義も大きかった。

＜フォーラム型情報ミュージアムプロジェクト＞「北米先住民製民族誌資料の文化人類学的ドキュメンテーションと共有」

国際ワークショップ

資料熟覧――方法論および博物館とソースコミュニティにとっての有効活用を探る

日時：2014年10月5日（日）～10日（木）
場所：国立民族学博物館
主催：国立民族学博物館、科研費若手研究（A）
企画：伊藤敦規（国立民族学博物館）

博物館は「資料特別利用規則」によって、館外者にも所蔵資料の熟覧機会を提供している。資料熟覧に基づく情報修正や加筆は資料収集と同様に重要かつ貴重な機会であるが、残念ながら多くの博物館においてそうした作業に関する特定のフォーマットは存在せず、熟覧の結果得られた情報が自動的に既存の資料台帳に加筆されない。

本ワークショップでは、民族誌資料の所蔵機関とソースコミュニティの人びとにとっての情報共有と熟覧の記録化の意義に注目し、熟覧作業における項目立てや追記の仕方や注意事項などの資料ドキュメンテーションの望ましいあり方について考察した。さらに、次の方々による連続特別講演も開催した。講演順に（敬称略）、ロバート・ブルーニグ（北アリゾナ博物館）、ケリー・ハイズ＝ギルピン（北アリゾナ大学）、チップ・コルウェル（デンバー自然科学博物館）、シンシア・チャベス＝ラマー（国立アメリカン・インディアン博物館）、ジム・イノーテ（ズニ博物館）、ヘンリエッタ・リッチー（国立スコットランド博物館）、ジェロ･ロマベンティマ、マール･ナモキ、ダランス・チェミカ、ラムソン・ロマテワマ（以上4名米国南西部先住民ホピの宗教指導者）。

また、ワークショップの後で、民博が所蔵する約280点のカチーナ人形の内、約半数の140点を制作した先住民ホピの宗教指導者4名と協働で、ワークショップでの議論と成果をふまえながら資料熟覧と地元の伝統的知識に基づいた資料情報確認を行った。

機関研究「中国における家族・民族・国家のディスコース」

国際シンポジウム

「中国文化の持続と変化――グローバル化の中の家族・民族・国家」

日時：2014年11月22日（土）～23日（日）
場所：国立民族学博物館
主催：国立民族学博物館
企画：韓敏（国立民族学博物館）

2012年4月から始まった民博の機関研究「中国における家族・民族・国家のディスコース」は、今年度で最終年度を迎える。今回の国際シンポジウムはその第3回目となる。

シンポジウムには、本館との学術協定を結んでいる中国社会科学院民族学・人類学研究所をはじめ、台湾、香港、韓国、米国から13名、民博から8名、日本国内の大学から多数の研究者が参加した。2日間の発表者は20名、参加者は延べ131人だった。

今回のシンポジウムでは、これまでの成果と蓄積を活かし、グローバル化の時代において、中国の家族、民族、国家のディスコースとその動態を分析し、文化の持続と変化のメカニズムを考察した。実体論的な見方ではなく関係論の視点から、これらのディスコースが、いかに交差し生成されながら、人びとの生き方やアイデン ティティに影響を与えているかを明らかにした。

また、中国本土に限らず、華人社会、カナダ、ロシア、韓国、タイ、ベトナム、日本などとの比較を通して、グローバル化時代において、中国における包摂と自律にまつわるディスコースのもつ特殊性と普遍性とを明らかにした。